

# キャンヘルプタイランド

## ネットワーク通信

2007年10月20日発行 第39号

バンコク便り

タイ・バンコク在住の西川会長から

半年前だったか、奥歯の詰め物が取れてしまったので、何度か職場近くの歯医者へ治療に通っていた。そこは、4階建ての歯医者にしてはなかなかの規模で、外国人患者も多く、この辺りではそれなりに高級な歯医者だと見られている。

何度目かの治療の時、受付を済ませ、エレベーターに乗り込もうとしたその時、そのエレベーターから降りてきた白衣の女性にすれ違いざまに呼びかけられた。それも、ニックネームで。そこではだれも知るはずのないニックネームをどうしてこの女性は知っているのか。驚いて彼女を見たところ、彼女は少しはにかんだ様子で「ジャム・ダイ・マイ（覚えてる）？」と聞いてきた。

だれだろう。

浅黒い肌の20代半ばと見える彼女の顔をまじまじと見つめてみる。

ほんの数秒・・・

軽く微笑んだ彼女の表情を見てすべてがよみがえった。

彼女の顔も、名前も、学校も、彼女との思い出も・・・

「バンオン・チャイ・マイ？（バンオンでしょ？）」

彼女は、13年前、キャンヘルプタイランドが初めてワークキャンプを行ったスリン県のチェロエンロット学校に通っていた。当時中学3年生だった彼女は一際熱心に我々の作業を手伝ってくれた。日本人、タイ人がペアになっての土運び、バケツリレー、作業後のバスケットボール、不自由な英語とタイ語、そしてポディーランゲージを使っただけのコミュニケーション、目を輝かせて聞かせてくれた夢、笑い、そして、別れる時に彼女が見せた大粒の涙。すべてが鮮やかによみがえってきた。

彼女は、家族が経済的困難を抱えているということでワークキャンプ以前から、キャンヘルプタイランドの奨学生として奨学金を得ていた。そして、キャンヘルプタイランドの奨学生として勉強を続け、数年前にバンコクに上京した。歯科衛生士となって。

私は1994年のワークキャンプで初めて彼女に出会い、その後、1年に一度行う奨学金授与式で何度か彼女と再会している。彼女の夢は、15歳だったワークキャンプで出会ったときも、その後の奨学金授与式で出会ったときも、変わらず一貫して「看護婦になること」だった。その彼女が本物の歯科衛生士として、目の前に立っている。幼いころの夢をあきらめずに追いつけてきたそのことが私にはうれしくてたまらなくなった。彼女は私が彼女の名前を覚えていたことに感激したようで口を手で覆い、そして、思い出したように仕事に戻っていった。

私は、エレベーターに乗り込み、案内された部屋の診察台に、彼女があれからどんな人生を送ってきたのだろう、キャンの奨学金が彼女の人生にどのくらい役に立ったのだろうかなどと考えながら座った。そして、治療が始まってからも同じことを考えつづけるはずだった。しかし、そうはいかなかった。

ここでは歯医者に歯科衛生士二人がつきっきりで治療に当たってくれるのだが、ふとみるとその一人が彼女だった。私の顔には目隠し用の布切れが被せられたが、彼女の前で虫歯のある口を大きく広げて座っている姿を想像して、私はとたんにきまりが悪くなり、何も考えられなくなってしまった。

ああ、恥ずかしい。

医者や看護婦は見ず知らずの他人であってほしい。その日ほどこの思いを強くした日はなかった。

キャンヘルプタイランド会長 西川 弘達

## 特集記事

## 2007年夏・ワークキャンプの報告

大矢 治夫

## ～はじめに～

2007年夏のワークキャンプは今年のパルティンブプログラムの年度計画に則り、実施の運びとなったもので、支援の要請があったノンウェン・ベンガム学校の集会場兼屋内体育館建設においてはロイエット県の教育委員会を通じ2006年度より支援の要請がありました。

学校当局と地元の父兄が寄付金による建設資金調達を地域の人々に呼びかけていたところ、建設資金の凡そ30%の獲得を目処に、計画を実施する事となり、2007年に入って資金獲得の目処がついた情報により、キャンヘルプタイランドとして支援を決定し、パルティンブプログラム実施のためのワークキャンプを計画するに至りました。



## ～ノンウェン・ベンガム学校～

ベンガム学校は幼稚園から中学校までの併設校で、全校生徒数は560名ほどの、この地方の田舎の学校としては大規模校に属します。学校は芝生のグラウンドと深い木立に囲まれた、とても雰囲気のあるたた住まいです。幼稚園・小学校の建物は築50年もの古く木造校舎でした。それに比べ中学校の校舎は鉄筋コンクリート作りの比較的新しい校舎が敷地の東側に立ち並んでいます。中学校の敷地は後から造成したようで、木立も少なく、小学校側比べると見劣りするたた住まいでした。

ワークキャンプ隊員の宿舎は小学校校舎側の保健室を女性の宿舎に、隣の仏教の部屋を男性の宿舎として用意されていました。高床式の建物で下は物置と自転車駐車場として使っています。床の隙間からアリなどの昆虫や、ネズミなどの出入りは自由で、部屋の掃除は欠かせません。通路を挟んだグラウンド側にはコンクリートのテーブルと椅子があり、休み時間には子供たちの溜まり場としていつもにぎわいます。本を読んだり、小石の将棋をしたり、にぎわっていました。キャンプ中はいつも折り紙で子供たちが集まります。



## ～子供達との交流～

ワークキャンプの本来の目的は建設作業における労働力提供と、人々との交流です。ことに学校での交流は大切な行事の一つです。従来のキャンプ(2003年度以前)では凡そ建設作業7割・交流3割ほどの比率でした。2004年度以降は建設の規模が小さくなり交流のウェイトが増してきました。学校からの要望も、授業をして欲しい。日本の文化や言葉を教えて欲しいとの要請が増えました。

しかし交流と言っても学校がプログラムを用意して、隊員が参加する場合は簡単で、ひたすら楽しんでいけばいいのですが、こちらで授業を受け持つとすれば、事前の準備は欠かせず、最低の準備として、授業の担当者と、授業のテーマの決定、教材の準備も欠かせません。言葉の問題もあり、講話中心の授業では、どこまで言葉が理解されたかの制約もあります。

今回はA日程の人達を中心に授業をする事を計画し、出発前のオリエンテーションで講師と授業内容が決まりました。それによって教材の準備をキャンですることになりました。

事前に用意した授業は次のような内容でした。

大学生の女性2人で中学3年生の英語の授業、授業内容、教材も二人に任せる。高齢の男性には、日本語の勉強として習字の授業、小学校5～6年生を対象。教材として太筆30本、半紙400枚、墨汁2本、日本の小学校の習字の教材20冊をキャンで用意。20歳台の社会人の男性には工作の授業として和紙作り、対象は習字の授業を受けた子供達です。準備した教材は風の竹ひご100セット、風の和紙、100セット、タコ糸1500m、マスキング紙テープ150m、カッターナイフ、鋸、等をキャンで用意しました。これらの教材で、習字で練習した好きな日本語を書いた和紙を飛ばす事ができます。これで子供達が大喜びするのはまちがいありません。他にも、日本文化を紹介するのに、音楽の授業、日常的な日本の生活のお話、折り紙や、手遊びマジックバルーン、サッカーや縄跳びなどができそう



で、これらの教材は個人で工夫して持参しました。現地に入って、子供たちがしょっちゅう私たちを取り囲んで遊びをしたり、習いたての日本語でコミュニケーションを取ろうとするのも、授業を通じての親近感がとても大きいようで、子供たちも家庭帰って、日本人との交流を必ず家族に話す事で、村人も子供を通じて日本人の滞在の様子を把握していることは朝、夕の散歩時に村人が皆笑顔で挨拶をくれるのがなよりの証拠でした。

## ～村人達との交流～

ノンウェーン・フェンガム学校はノンウェーン村とフェンガム村の境界に有り、学校の敷地の南側に凡そ南北 100m、東西 300m ほどのひょうたん型の池のほとりに位置します。ノンウェーンはウェーン池と言う意味で、フェンガムは美しい池の意味で、両方ともに学校の南にある池を意味しています。池を挟んで北側がフェンガム村、南がノンウェーン村です。池の南側にお寺と、北側の学校に隣接して村役場と診療所があります。ノンウェーン村を通過して7～8Km 程南西にノンポーク町があり、この地区の一番大きな町で、大きな市場もあります。日常の買い物は車でこの町まで、出かけます。

この付近の主要農産物はお米で、他にはこれと言った換金作物は無く、野菜、果物は自家消費が中心です。農家では家畜をいろいろ飼っていますが、一番の財産は肉用のこぶ牛です。他には水牛、鶏、あひる、合鴨、七面鳥、不思議なのは豚を殆んど見かけなかったことです。

タイの田舎はどこへ行っても犬が一番自由に、誇り高く生きているといつも感じるのですが、この村の犬たちはことのほかおとなしくて、夜になっても騒がしく啼くことは殆んどありません。

穏やかな村人と暮らしているせいか、豊富な餌があるからでしょうか、おとなしい犬には意外でした。おかげで夜の散歩も安心して出かける事ができました。

村人との交流として今回はキャンプの中間の土曜日、日曜日に子供達の家へ一泊二日のホームステイを実施しました。一家庭へ二人で訪問する事になり、翌日は子供たちと近くの森林公園でハイキングの計画でした。子供たちと一緒に村へ行き、各家庭で夕方まで自由に過ごします。村の大人とは言葉は通じませんが、子供をとおして意思は伝わり、さほどの不便はありません。涼しいハンモックで昼寝をしたり、久しぶりにくつろいだ時間を楽しみます。夕方からは村長さんの自宅に招かれて、夕

食会に参加します。近所のご婦人が何人も集まって、料理の準備が始まります。私たちも手伝って、会話が弾みます。すっかり暗くなった頃沢山の料理が並び、皆で食事となります。村長によればこの村に外国人の訪問は初めてのことで、どんな接待をしたらよいか解らないが皆さんを心より歓迎すると挨拶されました。食事が終わる頃には近所の人もたくさん集まって、この地方の歌が披露されたり、お返しに日本の歌を合唱したり、交流を深めます。

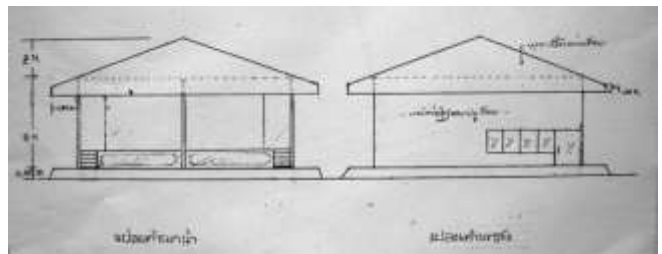
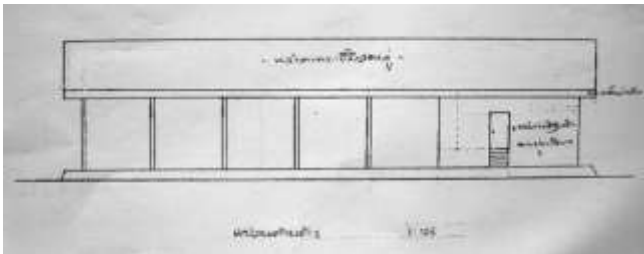
タイの人々の暮らしの中に仏教やお寺の関係はとても深く、互いに欠かす事のできない存在です。出家した僧侶は人々に尊敬を持って迎えられ、寺と僧侶を在家の信徒が生活の一切を支えています。僧侶は厳しい戒律を守って修行する身であり、1日2食の食事も全て托鉢で賄います。滞在3日目か仏教の祭りで、村人こそってお寺に集まり、私たちも一緒に朝食会に参加し、法話を聞きました。



## ～2007年夏・ビルディングプログラムの概要～

今年のビルディングプログラムで建設する建築物は集会場兼屋内体育施設の建設です。建て替え前の集会場兼学校食堂はたいそう貧弱で、耐久的にも、問題があり、以前より建て替えの必要に迫られていました。学校は校区の住民の募金や、役場の補助金などの資金で建設計画を立案し、2006年より募金活動を始めました。キャンヘルプタイランドは2006年にロイエット県の教育委員会を通じて資金援助の要請を知る事となり、2007年夏のビルディングプログラムとして建設資金の援助と、当学校での夏のワークキャンプの実施による労働力提供が建設プログラム推進の大きな力になります。

新築建物の概要は間口28m×奥行12m×高さ7m、室内面積凡そ330㎡の規模です。建物の外周は全て壁をつけて建物の正面にはステージを設ける予定です。屋内施設として照明設備、放送設備、天井扇風機程度を計画しています。床はコンクリート打ちのコテ仕上げ程度で建物外周には通路兼用の犬走りを設けます。室内備品として、テーブルと椅子を設置します。



## ～名古屋千種ロータリークラブからの資金援助決定～

名古屋千種ロータリークラブ様・会員有志の皆様からは以前より多大なご支援を賜っております。2004年の名古屋千種ロータリークラブ創立20周年記念事業としてキャンヘルプタイランドへ多額の資金援助をいただいたことに引き続き、創立25周年にあたる今年度も25万円の援助を賜る事が決定し、今回の建設資金として活用することをご報告申し上げます。

～建設作業～

ワークキャンプの一番の目的である建設作業現場は学校の芝生グラウンドの東に隣接する、中学校の敷地に配置されていました。私たちが到着した7/29日時点の工事進捗は建物を支える親柱、16基の内、14基の最下部のコンクリート打ちまで完成していました。これ以降の行程は完成した基礎の周りを土で埋め戻し、親柱16基を鉄筋コンクリートの地中梁で連結し、その後建物の床になる部分の土を整地して、その上にコンクリートを打ち込み、建物の土間を完成させる。

このような行程が私には読み取れます。現場の土質はイサーン特有な薄いベージュ色で、透水性の高い砂質土壌です。タイ特有のトン鍬で簡単に掘削が出来ます。素人集団の私たちには扱いやすく、便利な土ですが、農業には厄介な土で、保水力に乏しく、生産性の低い農業の根本原因の一つです。イサーン地方は自然の河川、湖沼が驚くほど少なく、大量の雨水のほとんどはこの土によって大地に吸収されてしまいます。帯水層は地下200～300mと深く、地中の岩塩が溶け込んで地下水としても利用できません。イサーンのほとんどの地域で井戸水の利用がなされないのはこの為です。

タイの内陸部、中央部は地質的に地震の発生しない地域です。土木・建築構造物の強度設計において、地震による影響はとて大きいのです。地震による強烈な引っ張る力、捻じ曲げる力、押し潰す力に構造物は破壊されてします。現代の知識ではどんな地震にも耐えられる構造物を作る事は出来ませんが、とんでもないコストがかかってしまうので、日本はある一定の地震に耐えられる強度計算で設計する事が法律で決められています。又現場の施工の段階でも、工事の進捗にあわせて、設計強度に見合う品質が守られている事を確認し、記録に残す事が法律で決められているのです。このことは、官庁工事も民間工事も同じです。

地震の影響は即人命に関わる日本で教育を受けた私には、地震の無いタイの状況は驚く事ばかりです。地震の力を全く考慮しない構造物はこんなにも簡単でよいのかと驚かされるのです。柱や梁の大きさ(断面積)は日本の1/3～1/4程度です。

タイの構造物の強度計算には、構造物自身の荷重に耐える強度と、収容する物や人の荷重意外は風の影響を加味するだけです。コンクリートの練り混ぜの品質管理は皆無で、日本では考えられません。私が今回の建設現場を含めて5回のワークキャンプの建設現場の状況からはコンクリートの強度不足を懸念する状態は無かったように記憶します。私は土木技術者として、コンクリートのプロなので、練りあがったコンクリートを目視すれば凡その強度は把握できます。今回もポットミキサーで練り混ぜしましたが、職人さんのやり方は砂・碎石・水のバランスは正直メチャメチャでした。コンクリートの強度を決定するのはセメントの量なのです。これが満足であれば強度は保てるのです。1回の練り混ぜに必ずセメントを一袋投入していました。バランスのよい配合をすればセメントはもう40%は減少できるでしょう。これが私の見立てでした。



～ワークキャンプ日々の出来事～

～7月28日(土曜日) 第1日目～

今年のワークキャンプ参加者はA日程5名、B日程8名、中途参加2名の15名と、タイからコーディネーター・兼通訳のムティターさん(ム.さん)の総勢16名のキャンプになりました。



人員構成は男性9人、女性6名です。年齢構成は20歳代の男性2人、女性3人。60歳台の男性7人、50歳台の女性2人。又初めての参加者7人、経験者8人という構成でした。出発前のオリエンテーションで数時間、顔を合わせしているだけの見知らぬ同士が、これから2週間以上にわたって共同

生活をするわけで、最終日に皆から「たのしかったなあー」の一言が聞けたらキャンプは成功です。中部国際空港で見送ってくれた会員の伊奈さんはスワンナプーム国際空港(新バンコク空港)まで見送ると言って同じ飛行機に乗り込むので一同唖然! 伊奈さんは旅行代理店に勤めていて、ワークキャンプの旅行荷物の手続きで、何かとアドバイスを受けていました。2006年のワークキャンプ時には荷物が多すぎて、子供たちのプレゼントの荷物に課税され、言葉が十分伝わらない事もあって1,000BSの出費を強いられた苦い経験がありました。今回も子供達へのプレゼントとして名古屋のNGO 団体である「アルシュ」のご好意によって文具など40kg、ダンボール4箱の荷物を持ち込む事になっていました。伊奈さんのアドバイスからタイの大阪領事館に直接電話をして、持込荷物の窮状を訴えたところ、書類で申請するようにとその場で回答を受けました。インターネットの情報から今年は日・タイ修好条約締結120周年の記念すべき年とのこと、ワークキャンプの目的でタイへ入国する我々の持ち込み荷物は子供達へのプレゼント用品なので課税は免除して欲しい。このことは日・タイ修好の証として実現を望む。との内容で手紙と、FAXで大阪領事館へ申請したのが出発前2週間でした。返事も無くてあきらめかけた7/26日にFAXで事務所に書類が届きました。タイ語の文章を翻訳すると、大阪総領事よりバンコク空港のタイ税関当局に対してキャンヘルプタイランドの持ち込み荷物の課税免除の要請文書でした。入国に際して荷物検査で問題が生じたらこの文書を提出するようにとの内容です。定刻に新バンコク空港に

到着後いよいよ入国手続き、荷物検査の係官に大阪領事館からの書類を手渡すと、怪訝な様子読み始めました。しばらくして「GO」と合図をくれました。17時頃、ムさんやほかの3人と集合して、全員そろいました。いよいよ出発です。空港から2台のリムジンマイクロバスにのりこみ、バンコク市内のバスターミナルへ移動となります。



これから長距離定期路線バスでロイエットまで凡そ600km、9時間の長旅です。学校へは早朝6時頃の到着予定です。バスターミナルは大混雑で荷物を置く場所に困るほどでした。タイは今日から4連休とのことで、田舎に帰省する人であふれていました。タイは鉄道が脆弱で代わりに道路はよく整備され、バス路線は発達しているのです。夕食をターミナルの食堂で済ませて、バスに乗り込みます。相変ず冷房のきつい座席で眠りにつきました。

#### ～7月29日(日曜日)2日目～

夜明け前午前4時30分頃、県都、ロイエット市に到着、目的のペンガム学校はここから北東へ未だ80kmほど先で、あたりが朝日で真っ赤に染まった5時30分ごろ目指すバス停に到着すると、そこは村の入り口で、先生が車で迎えにいらっしました。10分ほどで学校に到着します。そこは大きな木立に囲まれて、芝生のグランドも広々と、素敵なたたずまいの学校でした。驚いた事に、先生や、生徒たちが朝食の準備をしています。熱々のおかゆの朝食を済ませて、宿舎となる教室へ移動します。一休みして、全体ミーティング、部屋の掃除や、生活場所の整備を行い、午後は自由時間と、ノンボークの町の市場で生活用品の買い物などで過ごします。夕食は校長先生の奥様の差配で、先生や子供たちが作った、沢山の料理が並びます。夕食後村のお寺で開かれる仏教行事の前夜祭の式典に招かれ、全員で出かけます。夜風も心地よく、月の綺麗な境内を皆でろうそくを手に、回周する様は初めて目にする素敵な風景でした。こんな月の綺麗な夜はひさしぶり、懐中電気を消して皆で歩いて学校へ帰りました。



#### ～7月30日(日曜日)3日目～

今日は仏教の大切な祝祭日で、学校も建設作業もありません。お寺の行事に朝から参加します。各家庭は僧侶に差し上げる托鉢の朝食を持ってお寺に集まります。広い本堂に参加者全員が集まり皆が持ち寄った朝食を僧侶と一緒に全員で食べるのです。食事が済むと、僧侶が説教をします。ムさんが同時通訳をしてくれます。「人間は心が大切で、善行も悪行も全て心が決めること心を修行する場所がお寺である。魂は不滅で、死は肉体が自然に帰ること」ありがたい話でした。食事が終わって、先生の車で近くの観光です。農業用 水ダム湖の見学です。湖底が見えるほどの濁水です。次は洞窟寺院の見学、続いてキンピカ寺院の見学です。白いパゴダの立派な寺でジェリーチャック・モコン寺と言い、祭日でもあり、多くの参詣者でにぎやかでした。お昼過ぎに学校へ帰り、昼食を済ますと自由時間 先生に誘われて、田植えの見学と、和風にする竹の採取にでかけました。夕食は先生も同席して、お酒も入り大いに盛り上がりです。今夜も満月近い月明かりはことに美しく、ホテルも飛んで、夜が更けていきました。



#### ～7月31日(火曜日)4日目～

今日も学校はお休みです。日曜日が祭日でその代休のようです。職人さんは仕事に出てくるので、やっと今日から現場作業の初日です。9時前に職人さんも出勤し、挨拶。いよいよ作業開始です。午前中は柱基礎の埋め戻し、梁の鉄筋組み立て、午後にはコンクリート練り混ぜ用のミキサーも入り、柱基礎のコンクリート打ちが始まります。キャン名物のバケツリレーでコンクリートを流し込みます。16時前に初日の作業終了。疲れても皆満足そう。水風呂が心地よく身体を冷やします。夕食後ペンガム村のアイちゃんのお店へ飲みに出かけます。吼える犬もいなく、夜風も心地よく、ホテルも飛んでいます。パームヤシの梢の上に少し遅い月が昇ってきました。

#### ～8月1日(水曜日)5日目～

やっと今日から授業が始まり、子供たちとの初対面です。私

達の宿舍の教室の前が朝礼場所です。8時15分から朝礼が始まります。幼稚園から中学3年生まで全員が並びます。全部で11クラス、580人近い生徒です。国旗掲揚、仏教の教えの唱和の後わたしたちの紹介があり、全員が自己紹介と挨拶、ムさんが訳してくれます。アビートのボールペンセットとポシットを生徒会長に渡します。いつもと違う朝礼の長さで園児にはつらそうでした。9時前に終わって、私たちは現場作業を始めます。今日の作業は地中梁の掘削と梁の鉄筋組み立てです。作業と同時に交流の為に授業が今日から始まります。大学生の女性二人が中学3年生の英語の事業です。10時過ぎに授業参観に行くと、浴衣を着て、日本の四季を題材に、手作り教材で授業を進めています。授業は大成功で、生徒に囲まれて満足笑顔の二人でした。現場作業は午後から中止となりました。職人さんが型枠を完成しないと、仕事が出来ないのです。そこで皆で午後授業の手伝いに入りました。5年生を対象に習字と、和風作りです。他の生徒も集まって大賑わいです。風が完成すると全員校庭に飛び出して走り回っています。この日風邪で体調不良な男性の熱が下がらず少し心配です。

### ～8月2日(木曜日)6日目～

今日はいよいよA日程の帰国日です。朝礼の後、A日程の人は荷物の整理、B日程は梁のコンクリート打ちです。午後からはA日程のお別れ式があるので作業は出来ません。体調を崩していた男性は町の病院で診察すると思わしくなく一日入院となりました。宿舎で寝ているより安心です。14時ごろから図書室前の屋外ステージでA日程のお別れ会です。コサージュが贈られ、園児や中学生が綺麗に化粧して、民俗舞踊を演じます。授業は中止で全校生徒が見物します。私達のイベントの影響で、勉強の遅れが少し気になります。16時過ぎに生徒が帰って、先生と村の代表の人達との夕食会が木陰のテーブルで始まります。一度帰った子供たちも少しずつ集まって名残惜しんでいます。18時過ぎにA日程5人は出発です。これからロイエット市へ出て、夜行バスでバンコクへ移動となります。ムさんも同行で、中途参加者2名と共に帰ってくるのです。

### ～8月3日(金曜日)7日目～

今日はムさんが不在で、通訳無しの日になります。入院の男性を含めて7人減って急に寂しくなりました。9時頃から梁のコンクリート打ちが始まります。昨日職人さん達は日本人に負けない様にと残業して型枠組み立てをしたようです。人数は減っても皆張り切って作業が進みます。一日入院の男性も元気に帰ってきて一安心です。午後からもコンクリート打ち込みが続きまます。夕方ムさんから電話があり、中途参加の2人が台風の影響で、日本の出発が6時間も遅れ、今日中には学校へ戻れないとの連絡でした。それでも夜になって二人と合流し、夜行バスで明朝学校に帰ると再連絡があり、一安心。夕食は久しぶりにノンポークの町のレストランで夕食となりました。ご飯と麺のお店でしたが全員麺の注文です。熱々の麺がお腹にしみこみます。市場で買い物、ついでにシンハービールも買い増して、明日からのお休みが楽しみです。

### ～8月4日(土曜日)8日目～

朝7時ごろ中途参加の女性2人が学校に到着しました。ムさんは2日も夜行バスで大変です。今日から村の子供の家へ一泊二日のホームステイです。10時ごろ、子供たちが迎えに来て歩いて村へ向かいます。子供たちもはしゃいで楽しそう。村へ入ると皆笑顔で迎えてくれます。昼食後、年寄りや、疲れた人はお昼寝、若者たちは子供と遊んでいます。夜は村長さんに招かれてパーティ。今は仏教の修行期間で村人はお酒を飲みません。私たちが始めての休肝日となりました。夜中に雷鳴もすさまじく、スコールの襲来、明日は涼しくなるはずですが。

### ～8月5日(日曜日)9日目～

朝庭に出ると水溜りがほとんどありません。短時間とはいえ相当の降雨のはずが、乾いた大地が吸い取ってしまったようです。この夏は干ばつで、農家は田植えが出来ず困っています。昨夜の雨は乾田の慈雨にならなかったのでしょうか。朝食後、お寺へお参りにいきました。お坊さんが、今年は干ばつで心配です。日本から台風をつれてきて欲しかったと云って、一同大笑いしました。でもそれは本当だったのです。

お参りが終わり、一度学校へ帰ってから子供たちと、先生の車に乗車して、村から30分ほど東の森林公園へハイキングをする事になります。このあたりは国立公園で、森林保護区になっています。南西の方向はイサーンの大平原で素晴らしい眺望でした。

キノコを取ったり、森お散歩したり、ゆっくりした時間を楽しみます。14時ごろ学校に帰り、後は自由時間。夕食はレストランで買い込んだ麺料理。辛くて、おいしい。夕食後一人の日本人が尋ねてきました。ノンポークの町に住んでいる亀山さんという方でした。キャンのことを噂で聞いて尋ねていらっしやいました。亀山さんにはその後何かとお世話になりました。



### ～8月6日(月曜日)10日目～

朝から雨模様です。作業は梁の鉄筋組み立てを中心に行います。今にも降りそうな天候で洗濯物が気にかかります。交流授業は折り紙や、風船で、幼稚園児や、低学年の子供が対象です。

集中力の続かない年齢の子供たちの授業は大変です。現職の日本のベテラン教師が参加して授業をしてくれました。子供たちは目を輝かせて、時間を忘れていました。昼過ぎから雨になり、段々と激しい雨が降り続きます。あちこちに大きな水溜りが出来て、子供たちがはだして駆けて生きます。作業は中止で市場へ買い物に行くことになりました。明日の昼食は日頃のお礼を兼ねて、日本人が昼食を作って接待する事になりました。雨は一段と烈しく、集中豪雨の様相です。

夜は亀山さんも遊びに来て話がつきません。20時近くにやっと雨が止みました。

### ～8月7日(火曜日)11日目～

夜明け前から雨です。昨日のような豪雨でなく、しとしと降り続きます。現場は水浸しで、型枠や、鉄筋が土に埋もれています。土が乾くまで手が付けられません。今日は交流中心に授業と、料理の二組に分かれて行動する事になりました。授業は小学校4年生に社会科、オカリナ演奏による音楽、タイの先生と一緒に英語の授業をムさんの通訳で行いました。お料理のメニューは日本から辛口カレー50皿分を持参していたので日本風カレーと野菜の浅漬け、鶏肉のから揚げを50食作る事になりました。昼食までには3時間必用と9時から取り掛かりました。から揚げは手間取って一度に用意は出来ません。お陰で熱々が美味しいと好評、完食しまし

た。カレーの味は大人は美味しいといいましたが、子供にはあまり美味しくなかったようで、少し残念でした。塩味の浅漬けも売れ行き悪く、タイ人の味覚に合わないようですが、日本の味を少しは体験させられたと思っています。夕方になって雨が降っています。イサーン地方には大雨注意の気象情報が出ているとのこと、2人の女性が台風を連れてきたのです。明日の予定が立たなくて困っていると、亀山さんに頼んで一日観光案内をお願いしようと提案があり、早速電話で依頼すると、快く承諾いただき、ムクダハーンの観光が決まりました。



#### ～8月8日(水曜日)12日目～

夜中に雨は止み、雲が途切れて明るい朝でした。現場はぬかるんで仕事は出来ません。今日一日降らなければ明日は作業可能と判断しました。朝食時のミーティングで今日の予定は観光と交流と別れて実施を告げると皆大喜び。9時ごろ7人はムクダハーンへ出発しました。ここから約80km、1時間ほどで到着します。メコン川沿いのラオス国境の町です。昨年秋、日本の援助で第二国際友好橋が架かりました。近い将来にはベトナムとミャンマーを結ぶ横断道路の中心都市として

発展が期待されます。この橋の建設工事では、日本人技術者が工事中の事故で2名亡くなっています。今から3年前のことでした。ご冥福をお祈りします。

学校での交流授業は中学2年生に日本の文化についての社会科と、小学6年生に習字の授業を行いました。夕方近くに観光のグループも無事帰校しました。雨も一日降らずに、天候の回復が予想されました。

#### ～8月9日(木曜日)13日目～

朝は少し青空も覗いて、雨の心配はありません。9時頃現場に行くと言職人さんはまだ来ていません。昨日から田植えの作業で忙しいのでしよう。現場を見渡して、自分たちで出来る作業をする事になりました。水溜まりの水汲み、陥没箇所の埋め戻し、土で埋まった鉄筋の泥出し、型枠に流れこんだ泥掃除など、簡単ですが手間のかかる仕事です。素人集団にはうってつけの作業です。皆もくもくと取り組みます。一日掛ると予想した作業は午前中にすっきり、かたずきました。午後には様子を見に来た職人さんも、早速型枠の組み立てを始めます。15時ごろにはコンクリートの打ち込みが出来るようになりました。皆張り切ったコンクリート打ち込みです。梁が1箇所完成しました。皆大満足です。

夕食は町のレストランで先生を招いての晩餐会です。亀山さんご夫妻も招待し、近くに住北海道出身の梶さんもタイ人の旦那さんとイチロウ君を伴って出席されました。校長先生の計らいでプロの民俗楽団も参加して親睦を深める夜でした。

#### ～8月10日(金曜日)14日目～

今日が作業の最終日です。B日程の男性1人が帰国の途につきました。お盆のために1日早い帰国です。昼便の長距離バスに一人で帰ります。ワークキャンプ10回以上の超ベテラ

ンで安心して送り出せます。

9時過ぎに母の日の式典が始まります。本当は8月13日の日曜日が王妃さまの誕生日で、母の日として祭日ですが学校が休みの為、今日の行事となりました。主役はお母さんたちで、先生や、村の代表の母親たちも出席します。日本人の我々も来賓として前列に並びます。子供たちは母親代表の前にひざまずいて造花を捧げます。すると母親からやさしく肩を抱いてもらうのです。感激して涙を流す子供もいて、感動的な情景です。昼近く県の教育委員会の方が現場の視察にいらっやって、記念写真を撮ります。

午後からは最後の交流授業と現場作業に分かれます。午後の交流授業は6年生に和風作りの工作です。木曜日に習字の勉強は済ましているので順調に授業は進みましたが、風の製作に入ると、準備不足が露呈して、糸が足りない、接着テープが足りないで大忙しとなります。やっと完成して全員グラウンドに飛び出します。16時頃、現場では最後のコンクリート打ちが続いています。30分ほどして所定の位置までコンクリートが打ちこまれて終了となります。床のコンクリートの施工は出来ませんでした。梁のコンクリートは90%程完成したのです。職人さんたちと握手して、記念写真を撮ります。職人さんから、日本人は皆よく働いたね、と労いの言葉を受けて歓声が上がりました。



#### ～8月11日(土曜日)15日目～

別れの日、今日は学校はお休みです。いつもなら朝から子供たちでにぎやかな木陰のテーブルには誰もいません。帰りの荷物の整理、宿舎の掃除を全員で済ませ、市場への買い物や、自由時間です。お世話になった村人に別れの挨拶を兼ねて散歩です。いつもの散歩は早朝や夕暮れ近くでしたが日中は初めてです。土曜日といっても農作業らしく、閑散としています。昼前に学校へ戻ると、図書室前のステージは花で飾られ、午後から始まるお別れ会の会場作りに子供たちが集まっています。音楽にあわせてダンスの練習や、日本の若者たちも衣装を着け、綺麗にお化粧もしています。子供たちと一緒に踊るようです。13時から、ステージの前の木陰のテーブルでコンロに炭火を入れ、タイすきの昼食会です。村の長老や、村のご夫人達、亀山さんご夫妻の顔も見えます。子供たちもいましたが、財後のお別れ会として、少しお酒も入って、にぎやかな昼食となります。14時過ぎから子供たちの民俗ダンスが始まります。始めは中学生の踊りです。衣装もきらびやかに、生と会長の男子生徒も、女装して優雅に踊ります。続いて小学生の低学年の児童が綺麗に化粧して、かわいく踊ります。その後は日本の若者3人が中学生と一緒に民俗踊りを演じましたがリズムもしくさも揃って、堂々たる踊りを披露して、思わず歓声が上がります。踊りが済んで、お礼に日本の歌を披露する事になり、故郷、と星影のワルツを皆で合唱しました。

その後はステージの上・下で輪になって皆で踊ります。夕方近くいよいよおわかれの儀式が始まります。見送る人が手に白い糸を持ち、旅立つ私達の手首に結ぶのです。そしてやさしく手をなげます。「無事に日本へ帰れますように祈っていますよ。」とタイ語つぶやくのです。英語の先生が私の

手に糸を結びます。思わず肩が震えて、涙が先生の手首を濡らすと「ドン・クライ」と肩を抱かれました。記念品の贈呈と、日本人一人一人簡単に挨拶して、いよいよお別れです。先生や子供達、村人と写真を撮ったり、抱き合ったり、別れを惜しみます。先生の車に分乗して、ロイエット市のバスターミナルへ向います。亀山さんも見送りに来てくれます。バス待ち時間を利用して、少し市内見物をして、簡単な夕食をレストランで取り、バスターミナルへ向います。見送りの人達と最後のお別れをして、20時30分、出発です。思い出深いロイエットを後に一路バンコクへ。



～8月12日曜日・13日曜日16・17日～  
早朝5時ごろ北ターミナルへ到着、タクシーに分乗してバンコク・シティ・インホテルへ直行です。同じ場所から出発して、4台のタクシー料金は全て異なります。道に迷ったり、故意に遠回りしたのか判りません。朝食を済ませて一休み、夜行バスでは良く休めた様で9時には全員行動開始で元気です。市内観光をしたり、買い物をしたり、それぞれグル

ープで自由時間を楽しみます。私は日本の1/3程の価格で仕上がる写真のDPEのお店探しに出かけました。会話帳片手にあちこち訪ね回って、やっと探し当て、3時間ほどで10本のフィルムをプリントできました。その後はスーパーマーケットで果物の買い物です。最近の日本の入国検査では、お店や、市場で売っている果物は検疫で拒否・没収される事は無いようです。夕方には西川会長も同席しての夕食会です。ホテル近くの洒落た中華料理店です。タイ料理とは又違って美味しい料理に皆満足です。今日は王妃さまの誕生日で母の日です。ドンドンと花火も打ちあがって都心の夜空を染めていました。21時、16日間の労を感謝して、握手してムさんとお別れです。西川会長と空港に向かい、日付が回った0時20分一路帰国へ。

お盆入りの13日早朝全員無事に中部国際空港に到着、キャンのスタッフや家族の出迎えを受けました。体調の悪い人も無く、皆元気が何よりです。出迎えた家族や、スタッフ、参加者同士が「一杯楽しめた、面白かった、又いってもいい。」そんな会話が聞こえてくるのです。



## ～ワークキャンプの感想 ①～

大橋 宗範

今回「ワークキャンプ」の名のもと、ボランティアに参加したのですがどちらかという「タイと日本の文化交流」という事の方が強かったように思えます。精一杯働いてやろうという意気込みは少し裏切る事になりましたが、結果的によい形で終わったことは、私にとっておおきな糧となりました。

私はとくに子供好きという訳ではありませんが、人よりいっくら子供っぽいところがあり、そのお陰か、すんなりと子供達と接する事が出来て、いつしか子供達以上にふざけて、笑っている自分がいて、自然に笑えている時間が多かったように思えます。そこにはタイの人々の純粋さ、タイの宗教から来ているであろう、欲望への執着心の少なさ、偽りの無い素直さ、などのタイの人々の素晴らしさに毎日感動していました。

そして私は大の自然好き。そんな訳で大学でもキャンプサークルに所属していますが、40～50年前の日本の様だといわれるこの村の風景、どこまでも広がる水田や、自由に歩く牛や犬。時間がゆっくりと流れ、なんともいえない居心地の良さ。村を歩くだけで驚きや発見が多く、会う人ごとに笑顔で挨拶する、そんな平和の象徴みたいな生活を私は送っていた訳です。

そんな事で、帰国して、日本のせかせかせした時間の流れに、自分を取り戻すのに少し時間がかかりました

今回知った事、それは「人の本来あるべき姿、生活」だと思います。遊びを自分で考え創り出す。大そうなゲーム機なんか無くても、石さえ有れば楽しく遊べる。お腹が減れば自分で食べる物を探す。自然と年長者が年少者の世話をし、生活の仕方を教える。日本のように型にはまった生活、轢かれたレールを走るだけの生活を、タイの人々は送っていないと思いました。そしてタイ、否や、このイサーン(東北地方)の人々の生活が本来人間のあるべき姿、なのではないかと思いました。ペンゲーム村からバンコクへ移動して、発展している町並みは、何とも切ない気持ちになりました。

来年から私も社会人になる身です。日本での働きはどうしても仕事中心になりがちです。

今回の経験を通して、日々の生活の中を受身でいるので無く、毎日のちょっとした選択や迷いを、自分でしっかり考え、積極的に行動していきたいと思いました。日本は平和です。余ほどでなければ衣食住では困りません。ですから人の本来有るべき姿を見失い、平和ボケしていると思う事が多々あります。日本の「平和」とタイの「平和」。文字は同じであれ、内容は大きく異なります。皆さんはどちらを望むのでしょうか？





## ～ワークキャンプの感想 ②～

棚橋 朋代

今回のキャンヘルプタイランドのボランティアに参加したことは私の学生生活の中で本当に貴重な体験です。現地ロイエットでの生活において出会えた優しいタイの村人、可愛くてしょうがない子どもたちと、言葉の壁はあったけれども、お互いに理解しあおうという前向きな姿勢を大切にしながら、コミュニケーションをとり、触れ合うことがとても楽しくて、時がたった今でも現地の人たちのあったかい笑顔が思い出されます。

滞在していた日々でのひとつひとつの出来事が大切ですが、とくに印象に残っているのは英語で日本文化紹介したことです。日本の四季を紹介し、夏の行事である「七夕」を経験してもらうために生徒全員に将来の夢や希望を短冊に書いてもらいクラスで発表してもらいました。その中のひとつに「I want my mother and father to be happy.」（＝両親を幸せにしてあげたい。）という願い事があり、彼らの純粋な気持ちに、心が洗われたような感じがしました。どの生徒も目をキラキラさせて前をみて話を聞いてくれてすごく嬉しくて、とてもいい機会を与えていただけたことに感謝をしています。

今回は「学生のうちにしか出来ないことをしたい！」という目的で参加したわけですが、同じプログラムに参加していらっしゃった定年された方々の元気よさにおどろくばかりでした！私しなんかよりも断然パワーがあって、生き活きと過ごしていらした姿には大変刺激を受け、ぜひ年配者の皆様をお手本にして、常に好奇心旺盛に、どんどんやりたいことに挑戦する、そんな大人になっていきたいと思いました。人との出会いや経験から得ることがとても多く、自分の将来の糧となるような経験ができたことを心から感謝しています。



## ～ワークキャンプの感想 ③～

田中 仁美

ワークキャンプの1週間は、私にとって一生忘れられないであろう時間となりました。タイ時間と言われるように、タイでの時の流れはゆっくりとしていて、同じ1日とは思えないほどでした。A日程という短い期間にも関わらず、非常に充実した楽しい時間が過ごせたのも、タイの人々の温かなおもてなしと事務局の方々の配慮があってこそだと感謝しています。

建設作業のボランティアとして行ったはずなのに、こちらのほうが得るものが大きかった気がしてなりません。それでも、授業や遊びを通して子供たちが笑顔を見せてくれたことに救われました。また、言葉が通じない中で、互いにタイ語と日本語で話そうと奮闘したことはよい思い出です。言葉の一音一音や言い方、話す人の表情に敏感になり、さらにその空気からさえも何を言っているか理解しようと必死でした。

より多くの人とコミュニケーションが取れるように、というのを目的の1つに大学で言語を学んできましたが、言語とは別のフィールドのコミュニケーションというのを改めて発見したように思いました。「言語の壁を超えて」とはよく言われますが、今回は本当にそれを実感しました。そして、タイの人々や自然、文化のすばらしさに触れられたことはもちろん、世代を超えて様々な人と知り合えたのはわたしにとって大きな刺激となりました。

今年が学生生活最後ということもあり、学生でしかできないことを！という思いから、このキャンプに参加しました。しかし、このワークキャンプに参加して、そんな考えも崩れ去りました。60代のみなさんの若さといったら！！学生よりずっと元気だし若い・・・

そして何より好奇心旺盛。人はいくつであろうと、健康でやりたいことがあれば何でもできるものだなあって、キャンプ中、折にふれてそう思いました。

ワークキャンプを通じて、こんなにすばらしい出会いや経験を得たこと、とても嬉しく思います。また、このようなタイとの草の根の交流がさらに広まっていくことを願っています。そして私自身も草の根レベルでできることを行動に移していきたいです。



## ～ワークキャンプの感想 ④～

藤井 佳奈

夏休みのタイ旅行は私にとって、実り多きものでした。そんな機会を与えてくれたキャンへの感謝の言葉の代わりに、この感想文を書きます。

タイで過ごした二週間に会ったもの、驚いたこと、おいしかったもの、知ったこと、変なものは数え切れないくらいあるけれど、敢えてここでは「ボランティア」に関して、私が学んだことを書きたいと思います。そのためにも、参加までの経緯を説明します。

私は中部大学国際文化学科の学生です。東南アジア地域、中でもカンボジアに興味を持っていて、夏休みを利用してカンボジアで観光ではない滞在をする方法を探していました。

そこで目をつけたのがNGOの企画するスタディーツアーでした。名古屋で開かれた合同説明会に参加し、プログラムの内容とスタッフの方の人柄の良さに惹かれ、キャンのワークキャンプに決めました。ホテルなどではなく学校に滞在できる点、日程が他と比べて長いこと、その割に費用がやすいこと、移動や観光が少ないことが魅力でした。小さなころからボランティアに抵抗を感じていたので、今回が初めてのボランティア活動です。子供と遊ぶのは苦手で、体力にも自信は無く（建設作業なんて後にも先にもこれっきりでしょう）、そのうえ行きたかったのはカンボジア・・・。そんなたくさん壁があったにも拘らず、それらを無視して、参加を決めることができよかったと思っています。

ボランティアに抵抗があったと言いましたが、それは今でもあります。地域のゴミ拾いは、問題の解決に結びつかないし、



老人との交流などは面倒なところは他人任せで、無責任な印象を受け、寄付金の呼びかけにも「本当に有効利用されるのかな？」という疑問を抱いてしまいます。生産に結びつかないために他の活動や寄付に資金を頼っていることも中途半端と感ずるので、他人のために何かできるということは、もちろんいいことですが、私には向いていないと感じていました。

「ほんとうに誰かの役にたっているのか、継続性があるのか、ボランティアってなんだろう？」国際学部の学生という立場から、これからはもっと関わることが増えると思われるボランティアについて、実際参加することで少しでも知ることができるのではないかという期待もありました。

私の当初のイメージでは、集会場の建設費をキャンが負担して、無償の労働力としてボランティアを派遣し、参加者には人の役に立ち、また現地の生活を楽しみ学ぶことができるという活動であって、だから参加者は寝泊りして、ごはんを食べて、それでもおつりが出るくらいしっかり働かなくてはいけないと思っていました。しかしそれは違っていました。

学校では子供も大人も大喜びで歓迎してくれ、至れり尽くせりで世話を焼いてくれます。

みんな日本人に興味津々で写真を撮られ、サインをするために来たのかと思いました。三度の食事は豪華でほんとうに美味しく、土日には車で観光に連れて行ってってくれる。子供たちはいつも傍にいて、分からないことがあると何でも熱心に教えてくれました。肝心の建設作業とはいえば手伝ったのは少しだけで、完成には程遠い状態で帰国となりました。費用もキャンが負担したのは一部で、残りは学校が負担することになっています。まるで私たちがボランティアされに来たようでした。

私たちは先生になって授業をしたり、子供と一緒に授業を受けたり、子供と遊んだり、そういうことを期待されていました。ただ楽しんで、感謝されるので申し訳ない気持ちになりました。タイの人たちは日本語を話したがっていて、私たちはタイ語を教えてもらいました。そういった交流のなかで、出会ったタイの子供は私にとって「子供」ではなく、一人の友人になりました。大人も子供もいつもニコニコしていて、親切でした。私も気付くと笑顔になっています。小さな子でさえも無意識に、笑顔が人を幸せにすること、それによって自分も幸せになるということを知っているのです。それは私をはじめ、今の日本人には欠けていて、本当に大切なことなのです。それを教えてもらって、私は「人の役に立ついいこと」をしたいのではなく、「この子供のためになにかしたい」と思うようになりました。ボランティアとはただその行為があるのではなく、人と人が関係し合って生まれるもので、誰か大切な人のことを思っている贈り物のようなものだとは思いますが。集会場は建てしまえばそれでよしだけど、私のなかに残ったものはこれからもずっと生きています。それがどこかで誰かのためになる日がきっと来ると感じています。

ボランティアについてはまだまだたくさん疑問があります。とても難しいものです。これからもいろいろな経験をして自分なりに学んでいけたらと思います。

…感想文の提出にご協力いただきありがとうございました。 運営委員一同…

## 活動報告

### ○ 翻訳会 ○

7月&9月とキャンヘルプ事務所の2階で「翻訳会」を開きました。7月は「タイ人女性友の会」の大久保スリラットさんや埼玉県在住のドナー山岸さんがわざわざ参加して下さり、その他過去に娘さんがワークキャンプに参加したご経験を持つ山本茂さんなどたくさんの翻訳ボランティアの方々に参加して下さいました。生きたタイ語に触れ、いろんな質疑応答が飛び交う中、翻訳作業以外にタイの文化やタイ語についても学ぶことができとても楽しく有意義な時間となりました。

今回翻訳したのは、この夏奨学金授与式でもらってきた奨学生の書類です。ドナーの方に発送する前に、タイ語の部分タイ語から日本語に訳して書き込んでいく作業です。なかなか根気のいる作業ですがみなさん一生懸命取り組んで下さいました。奨学生の書類の数が多いため、地道な作業故に完成するまでに時間がかかりますが、少しでも奨学生からのドナーの方々への感謝の気持ちなど、タイ人や翻訳ボランティアの方々との協力し合い、お伝えすることができたらと日々取り組んでおりますので、お手元に届くまでに多少お時間かかることご了承いただけますようよろしくお願い申し上げます。



## ○ 今年も岐阜県可児市の「手づくり絵本大賞」に応募 ○

図書支援プログラムは毎年岐阜県可児市が主催する、創作絵本コンクールにタイの子供達の作品を応募してきました。このコンクールは「花のまち可児手づくり絵本大賞」といいます。毎年絵本のテーマが決められて、テーマに沿った作品の優劣が決められます。

今年のテーマは開催の第10回目を記念して数字の「10」でした。毎年の継続テーマとして「ばら」もあります。今年は夏のワークキャンプを実施したブンガム学校の作品を含めて5作品を応募いたしました。この5作品は数十冊の作品の中から厳選した5作品です。

キャンヘルブタイランドはタイの学校に呼びかけて、絵本の創作活動に取り組む事と、学校に図書支援を実施する事を結びつけて、図書への感心が高まる事を期待しました。作品の応募は今年で5回目となります。

このコンテストは年齢制限も無く、全国から600点以上の応募がなされ、レベルの高い催しです。作品の展示は可児市広見公民館ゆとりピアにて、11月10日～18日で、最終日に表彰が行われます。



## ○ 奨学生からの手紙 ○

奨学生からこんな手紙が届きましたのでご紹介いたします。

奨学金スタッフの方へ

こんにちは。今回の手紙はいろいろな話があります。この間の金曜日奨学金を受け取って本当に嬉しかったです。勉強のためのもの、例えばバドミントンのラケット、新しい制服、勉強に関係ある本を買って、残りのお金は母に預け、必要なときに取っておきます。

土日はいつも暇ではなく、親戚のところで田植えの労働をします。1日150パーツもらえます。このお金で学校に行きます。母親に面倒をかけなくて済みました。お母さんの負担を少しでも減らしてあげたい気持ちです。

私の家族は7人で、今勉強しているのは私と姉です。他の人は結婚したりしています。母親は大分年を取りました。私は将来先生になりたいです。学生ができる人に、いい人になり明るい将来を持つようになって欲しいです。彼らの両親は大変苦労していると思いますが、彼らが同じような苦労を繰り返さないようになって欲しいです。母は私に進学して欲しくないと言ったことがありました。私はなぜと聞きましたが、母はそのお金が家にはないからだと言いました。私の上の兄弟たちは何人か借金を抱えています。借金の返済を求めてやってくる人もいました。私はいい成績を出して先生になりたいです。絶対になります。母は仕送りできないと言ったので、自分でお金を稼いで勉強することもできると思います。そう言うとお母は少し安心したようです。今でも母にお金を求めることはあまりないです。自分で稼いだお金を使っています。毎日学校に20パーツともち米を持って行きます。しかしバス代はガソリン代の上昇とともに往復12パーツにあがりました。

私の誇りは私たちがしゃべっている「ソー」という言語です。どこの言葉とも違います。聞いて楽しい言葉です。他の地方の人は勉強したがりませんよ。

## ○ 第16回全国ボランティアフェスティバル ○

今回のイベントは名古屋国際会議場（白鳥センチュリーホール）で開かれましたが、参加者はざっと2000人くらいでした。舞台上踊りや歌などもあり、たくさんの団体がブースを出していたり、食べ物も出してとても賑やかでした。

イベントの収穫は、なんといっても売り上げの大きさだと思います。7月の授与式後にバンコクのチャットチャックで1万円分タイ雑貨を購入してきましたが、色も鮮やかでかわいいと男女共に評判で3分の2以上売ってしまいました。売上金は¥28,600円です。なかでも、木で作った布入り（木彫りの象つき）のお箸が大人気でした。日本人は常日頃からお箸を使う習慣にありますが、最近では、エコ問題でMy箸を持つ人が増えているようです。5本しか買ってこなかったのが、あっという間に売り切れてしまい、もっと買ってこればよかったなと思いました。続いて人気があったのが象のキーホルダー。象関係はキーホルダー以外にも小銭入れや小物などとても人気がありました。あとは、ビーズや石で作ってあるきれいなプレスレット。5cmほどの大きさの置物のバスデーケーキやミニお香セットも人気があり、まとめ買いされる方や奥様へのプレゼントに買っていかれる男性もいました。



## イベント

### 今後開催されるイベント情報

ワールドコラボ 日時場所：10月27日（土）28日（日）名古屋市栄もちのき広場  
 内 容：ブース出展、タイ雑貨販売

## 訂正

### 奨学金プログラム

前回の NT 通信で今年の7月に行われた奨学金授与式の人数表を記載させていただきましたが、一部ミスがあったため訂正したものを改めて記載させていただきます。  
 ご迷惑をおかけしまして誠に申し訳ございませんでした。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

#### ★ 2007年度奨学金授与人数（訂正版）

県名	授与人数	男性	女性	県名	授与人数	男性	女性
サケーオ	14	5	9	ムクダハーン	15	3	12
プリラム	9	2	7	ナコンパノム	6	0	6
スリン	17	3	14	サコンナコン	12	3	9
シーサケット	10	4	6	ルーイ	4	2	2
ヤソトーン	12	9	3	チャイヤブーム	4	1	3
ロイエット	9	1	8	ノンブアランブー	6	0	6
マハサラカーン	6	2	4	ウドンターニ	3	0	3
カラシン	4	3	1	計	131	38	93

## 運営委員会

（2007年8月～10月）

活動	月日	場所	内容
運営委員会	8月25日	名古屋事務所	ワークキャンプ報告
運営委員会	9月22日	名古屋事務所	ボランティアフェスティバルについて
運営委員会	10月20日	名古屋事務所	NT 通信発送作業

## 事務所

### 事務所移転のお知らせ

キャンヘルプタイランド事務局が入っているビルの取り壊し決定により、来年の3月までに事務所を移転しなくてはならなくなりました。現在、急ピッチで移転先を探している最中です。本年中には移転先を決定できる予定です。皆様には、事務局の住所変更等でご迷惑をおかけすると思いますが、ご了承くださいませ。  
 また、名古屋市内で格安事務所物件の情報をお持ちの方は、ぜひ事務局までご一報くださいませ。よろしく願いいたします。

### 編集後記

- ▼ 奨学生から届いた手紙を今回の NT 通信に掲載しました。もう読んでいただけたでしょうか？  
 こういう手紙を受け取るたびに運営委員としてキャンヘルプタイランドの活動にかかわることができるのをとてもうれしく思います。  
 会長からのバンコク便りにもあるように、大きく成長した子どもたちとバンコクで再会をするときなどは本当に感動的です。

ばんしげき

<キャンヘルプタイランドネットワーク通信 Vol.39>

発行 キャンヘルプタイランド  
 発行人 西川 弘達  
 編集人 坂 茂樹  
 発行日 2007年10月  
 住所 〒450-0003  
 名古屋市中村区名駅南1-20-11  
 NPOプラザ名古屋2F南  
 Tel & fax 052-566-5131  
 (OPEN: 毎週火、木・土曜の13~17時)  
 E-mail: canhelp@npo-jp.net  
 ホームページ: <http://www.canhelp.npo-jp.net>